
白い蓮とモノクロ日常

蓮華永

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白い蓮とモノクロ日常

【Nコード】

N0497P

【作者名】

蓮華永

【あらすじ】

主人公神埼白蓮は幼い頃父の仕事の邪魔をしてしまい、体内に狐と狼の妖怪を取り込んでしまい、三重人格になってしまった。其の二匹が時折表、つまり白蓮の身体を借り、色々と問題を起こす、シリアスも多分あるコメディ。

モノクローム1

昔・・・父の仕事の邪魔をしてしまった・・・其の日から、私の身体には・・・、異変が起こり始めた・・・背中に狐と狼の刺青いれずみみたいなものが刻まれたいた・・・。

「あれえ．．．．．、もう朝あ．．．？
白銀しろがね、黒鉄くろがね．．．、起きて
るう．．．．．？」

一人の少女が声をかけた。だが、其の少女が居る部屋には少女以外誰も居ない。だが、確かに『部屋』には少女以外居ない。でもちやんと居るのだ、人間ではない者が……二人……。

『主！お早うございます！』

「主、お早う。そろそろ起きて準備しないと学校遅れるぞ……」

「そつかあ……。て、ええええええええつええつええええええええええええ！！！？ あ、本当だ！！ ヤバい、起きな
きや！！ 黒鉄有難う！」

『いや・・・、主が遅刻しない様と思ってやったことだから気にすることは無い』

「黒鉄ホント好きよ！ 其処ら辺の男よりも！」

『黒鉄羨ましいぞ!! 主に好きと言ってもらえるなんて・・・!!
! と言うか主! 其処ら辺のと言うことは私も混じっているので
しょうか!!?』

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

『返事を下さい!』

[illegible]

「先ほどよりか長いのですが!!」

「気のせいよ、白銀。私は貴方の事も愛してるわ・・・、多分・・・」

白蓮は最後の言葉を物凄く小さく呟いた。

白蓮は他から見れば独り言を言っているようだが、違う。白蓮は話しているのだ。身体の中『中』に居る人外魔境の者と・・・。

一人は狐の妖怪、白銀。もう一人は狼の妖怪、黒鉄。

此の二人、もとい二匹は昔、白蓮が父親の仕事の邪魔をしてしまったために体内に入り込んだ。此の二匹が入り込んだ所為で白蓮の背中には狐と狼の刺青の様なものが刻まれた。其の為安易に人前で服を脱ぐことが出来ない。身体測定などは大まかに濁しつつも事情があると言って、別口でやっている。

「お母さん、お父さんお早う!! じゃ、行つてきまーす!!」
「・・・、行つてらっしゃーい」

白蓮は朝ご飯を食べずに学校へ走って行った。

モノクローム1（後書き）

自分の作ったキャラを書くと言うのは結構楽しいですね。

これは不規則連載で気が向いたときにしか更新しないと思いますが、それでも読んでいただけると光栄です。

これからよろしくお願いします。

モノクローム2

「セーフ!! 間に合った!」

『よかったな、主』

『見事な走りです、主! 素晴らしかった!』

「何だろう、ほめられているはずなのに、あんまり嬉しく感じないなあ」

白蓮はそう呟き、鞆を置いた。

「あ、お早う。白夜ちゃん」

「だから、神崎さん、俺男だって……」

「だって、可愛いんだもん」

白蓮の前に座っているのは神楽白夜。男なのに、髪は長く、瞳も大きい綺麗な碧色。確実に女にしか見えない。

「ホント、綺麗だよねえ、此の髪……。白色に少し銀色を混ぜた様な髪色……。本当に綺麗……。」

「女の子に褒められてもなあ……。それに、神崎さんの髪色の方が綺麗だと思うよ……。碧色と紫色を混ぜた色だし……」

「あ、そう言えば、お揃いね」

白蓮は笑顔を見せた。其の笑顔に大体の男は立ち止まる。実際、白蓮は三年女子の中でダントツで可愛い方である。ファンクラブなどあったりする。大概こういうのは、他の女子は恨んだり、嫉妬したりするが、女子受けも良い為、女子のファンも居たりする。

『主に馴れ馴れしくおって……。!』

『落ち着け、白銀』

『落ち着いていられるか! 主は此の俺が嫁にと決めた存在! 他の男などに渡してたまるか!』

黒鉄はこれ以上来ると白銀をもう止めることは不可能と感じ、白

蓮に耳打ちした。

『主、今すぐ、その場から離れて下さい。きつと、白銀が出てきます・・・!』

「（嘘・・・! 何で・・・!?!）」

『取り敢えず、その場から立ち去って下さい!』

「ごめん、白夜。私ちよつと用事あるから、またあとで!」

「? うん・・・」

白蓮は人気のない屋上へ行くと、急に髪の色が毛先の方から変わりました。徐々に白くなり、瞳の色も碧色から、橙色に変わっていく。そして、左一房だけ、白蓮の髪の色で他は完全に白色になった。

「『さあ、私の主と馴れ馴れしくしたこと、後悔させてくれるわ!』」

白銀、暴走。

モノクローム2（後書き）

ちよつと、楽しいです。

これは、「神楽家」とつながってるんです。
だから、たまに白夜が出てきます。

モノクローム3

白い髪が無造作に後ろで括られており、それが動くそれに合わせて揺れる。顔立ちは白蓮のものだが、少し違い、誰も白蓮だとは気付かないが、一人例外が居る。

「おい！ 白銀、貴様『また』白蓮さんの身体を乗っ取ったなッ！」
「『ゲ、出やがったな、此の似非えせ陰陽師おんみょうじ・・・』」
「『似非』とは何だッ『似非』とは！」

憤りを見せている青年は白蓮の幼馴染、神谷依竜かみやいりゅう。家が陰陽師で、白蓮の父親の実家でもある。つまり従兄弟同士である。

「『少しの間黙っている。じゃなきゃ、俺も気が乗りはしないが、主を『キズモノ』にするぞ？』」

「ちょ、白銀ッ！！？」

「『（冗談です。少しの間だけこいつを黙らせるためです・・・）』」

「だからって・・・」

白蓮の声は外部には聴こえない。だから、下手して声を出したら独り言を言っている変な人だ。

「・・・・・・・・・・きずものって何だ？」

「『よーし、張りきって先にこいつを仕留めようッ！』」

「何故そうなるッ！？」

依竜は白銀に突っ込む。

白銀は依竜を黙らせた後、白蓮のクラスに行った。誰もが啞然とした。見た目は白蓮のようで、違う。白蓮はそれらを気にもせず、白夜の傍に行った。パンツと机を叩き、口を開いた。

「『少しいいか・・・？』」

「へ・・・・・・？」

白夜は呆然と変な返事をした。訳が判らない。白蓮のようで白蓮ではない人。いったい誰？ と言った態で白夜は首を傾げた。

「『取り敢えず、来てほしいんだが・・・・・・』」

白銀は額に青筋を浮かべた。

「え、う、うん。判った・・・・・・」

少し恐怖を覚えながらも白夜は返事をしてしまった。

モノクローム3（後書き）

白夜は次回どうなるんでしょう・・・。

モノクローム4

「お前、もう二度と、白蓮に近付くな・・・」

「そう言われても、前の席に居るんだけど、神崎さん・・・」
「屁理屈を言うなっ！」

「立派な理屈だと思っただけどっ！？」

今、白蓮（白銀）と白夜が居るのは屋上。屋上は滅多に人が来ないため、こういうときには適切な場所だ。

「そ、それより、君は神崎さんのお友達？ 何でそこまで云うのかな・・・？」

「私は白蓮の『特別』だっ！ それに私にとっても白蓮は『特別』だっ！」

「へえ、そうなんだー。特別な存在が居るっていうのはいいよね・・・」

白夜はにこつと笑った。不覚にも、其の笑顔に白銀は顔を紅くした。白銀はすぐに気を取り直し、顔を横に勢いよく振った。

「と、取り敢えず会っくなっ近付くなっ！！」
そう叫んだ。

「白銀・・・、そんなことの為に勝手に出てきたの・・・？」

「（あ、主・・・？ どう、なさいました・・・？）」

白蓮の様子がおかしいので、白銀は怪訝な顔した。白夜はどうしたものか、と思い、首を傾げた。

「拒絶ッ！ 彼の者に我が身体を乗っ取られんッ！ すぐに立ち去れッ！！」

「あ、主・・・ッ！！？」

白銀は叫んだ。その言葉は完全に『表』へ出ることが出来なくなる言霊。

髪は先の方から色が変わり、戻り始めた。

「『ち・・・っ!』」

白銀は舌打ちをし、白夜の首根っこを掴み、屋上から出した。そして、扉を閉め、その場に突っ伏した。

強制的に身体が戻るときは、宿主と其の宿っているものもダメージを受ける。

「『はっ、は・・・。あ、るじ・・・。お止めくだ、さい・・・。今すぐ私が戻りますから・・・』」

白銀は自分だけが苦しいのは耐えられるが、白蓮まで苦しい思いをするのは厭だった。白銀はすぐさま自分から戻った。

「白銀、もう二度と表に出ないで。また、出ようとするのであれば、お父さんに祓ってもらうからね」

『は、はい・・・。』

白銀は反省したが、白蓮の憤りはおさまらない。

モノクローム4（後書き）

白銀は馬鹿な子。

こんな子ですが、気に入って下さい。

ただの女好きだと思って下さい。

モノクローム5（前書き）

久しぶりの更新！

モノクローム5

眠い眼を一生懸命開けながら、髪を梳く。だが、其の髪の色は黒色。左横の一房が白蓮の髪の色。

今、白蓮の身体を借りているのは、黒鉄である。

「主、もうそろそろ………」

『黙って』

「『………』」

今、白蓮は体内にて、白銀と対峙をしている。

黒鉄は溜息を盛大に吐く。

事の発端^{はつたん}は、先日の白銀の失態だ。

「『ま、自業自得、か………？』」

其のまま黒鉄はダイニングに行った。

『………』

白銀は正座をし、手を膝の上で握っている。気まずかった。白蓮はただ無言で白銀を見る。

「……後悔はしている？」

『はい』

「でも、反省はしていない」

『はい』

スパーン！

勢いよく白銀は叩かれました。

じん、と掌てのひらが痛む。これが人を叩いた痛みだ。

「後悔して、反省もしなさいよ・・・馬鹿狐きつね・・・！」

「申し訳、有りません・・・」

ほろほると、白蓮が泣く。白銀はぎよつとし、おろおろとする。

「お願い、だから・・・表に出てきて、他の人に迷惑かけないでよ・・・！ 困るの私なんだからあ・・・！！」

「あ、主・・・！？ な、泣かないで、下さい・・・！！！」

白銀が白蓮の涙を手の甲で拭う。

「私は、出てきて、羽根を伸ばしてる二人を見ると閉じ込めてるって罪悪感が生まれるけど・・・。こんな殺意のある罪悪感は初めてだよ・・・！」

「主、果てしなく矛盾してます。それは」

白銀は苦笑いをする。白蓮が混乱している。珍しいと思いながら白蓮の頭を撫でる。

「こんの馬鹿狐え・・・！ 狼より馬鹿な狐は要らないわよ・・・！！」

「酷過ぎます・・・」

両手で白蓮の顔を包む。白銀は白蓮に微笑み、云った。

「俺は、貴女が愛してくてしょうがないんです・・・。他の男が貴女の傍に居るのは、厭なんだ・・・」

「だからって、白夜ちゃんに迷惑かけないでよ・・・！」

「はい、反省します。後悔もちやんとします」

「本当に・・・？」

「はい」

真っ直ぐに、白銀は白蓮を見る。

「なら、赦す。」

「ッ、有難う御座います！」

白銀と白蓮は笑い合った。

モノクローム6

ピンクピンクピンク。

何処もかしこも、ピンクだらけ。白蓮は溜息をつく。

「・・・此処まで、ピンクだと、厭気がさすね・・・」

「そうですね。そういえば、主は誰かにあげるんですか？」

黒鉄が聞く。それに白銀は反応し、叫ぶ。

「主！ 俺達にもくれるんですか！？」

「（あげるよー。ちゃんと表に出て食べてくれると、嬉しいな！）」

「当たり前です」

「大切な主から貰ったものですし、ちゃんと、表に出て食べさせも
らいます」

黒鉄が云う。

「主、それは手作りですか？ それとも、市販ですか？」

白銀が聞く。

「（昨日作ってたのは、何だったのかな？）」

「チョコ」

二人はハモる。白蓮は薄く吹き出し、云った。

「（当たり前。二人にあげるチョコと、白夜ちゃんにあげるチョコを
作ったの。旨く出来てるかは、自信無いけど）」

白蓮は自嘲気味に微笑んだ。

「大丈夫ですよ。主は料理が上手じゃありませんか。美味しいに決
まってます」

と、黒鉄。

「そうですね。主の作るものは全て美味しいじゃないですか。です
から、大丈夫です！」

と、白銀。二人が励ましてくれたので、白蓮は普通に微笑んだ。

「（よかったー。それなら、君等と白夜ちゃんに安心して渡せるよ）」

「『ええ！』」

そうこうしているうちに、白蓮は家に着いた。

「只今帰りました、白蓮です」

神崎家では、挨拶と一緒に名前を名乗ることになっている。幼いころからやっていることなので、大して面倒くさくは無いが、他の家で何故やっていないのかが、不思議だと、たまに呟く白蓮だった。

「お帰り。今回もちゃんと白蓮ね。よかったわ」

「母さん。二人に失礼だよ。例えば人外であっても、礼儀忘れべからず。そう云ったのは、母さんでしょ？」

「そうね。御免なさい。黒鉄殿、白銀殿、お帰りなさい」

母親は軽く会釈をし、人外に挨拶をする。

『『只今帰りました』』

其の返しを聞き、母親はにこりと微笑み、奥へと行った。

神崎家は、古くから陰陽師をしている神谷家の血筋。其の為、誰もが霊力を持っている。

其の為、徒人^{ただひと}が聞こえない声も、見えない姿も、聴こえるし、視える。

ただし、其の仕事振りを白蓮は見たことが無い。

モノクローム6（後書き）

あー、これと神楽家は書いていて、
和む。

モノクローム7

神崎家には風呂場と呼べるものが二つある。

厳密に言えば、もうひとつは洗礼の為のものである。

白蓮は毎日、帰ってきたら洗礼を行っている。

白装束に着替え、最初に聖水を浴び、水の張った浴槽の様なものに身体を浸す。

「冷たい……流石に慣れない……」
毎日やっているが、これだけは慣れない。冷たく、全ての温度が奪われる。

白蓮が毎日洗礼をやるようになったのは、白銀と黒鉄が体内に宿ってからだ。

まがいなりにも、二人(?)は妖怪なので、身を清めなければならない。

「そろそろ良いかな……?」

ザパアと音をたてながら白蓮は出る。白装束一枚のみなので、裸体が透けている。白銀は何故か赤面していた。

『あ、あああああ主ッ！ は、早く体を拭いて下さいッ！』
「? うん、判った」

何故? と思いつながら白蓮は体を拭いた。そして、白装束を脱ぎ、

普段着に着替える。

白と青のボーダーパーカーに黒色の短パンに黒い靴下。足が長い為、余計に長く見える服装だ。

「父様、ただいまです。洗礼、終わりました」

「お帰り、白蓮。さ、寒いだろうから、ココアを飲みなさい」

「はい」

白蓮の父は強面だが、かなり優しく、見た目とのギャップが激しいと母が云っていた。

「さて、白銀殿、黒鉄殿」

『は、はい！！』^{かたしる}

「何時かは何かを形代と、白蓮の身体から出ててもらいますが、その時に……」

『その時に……？』

二人はオウム返しの様に其れを云い、次の言葉を待つ。

「白蓮に手を出した時は、容赦なく祓わせいただく」

『は、はいッッ！！』

この時動揺しておおきな声を出したのは、白銀だった。

モノクローム 8

白銀シロガネの慌てぶりに、白蓮ハクレンはくすくすと笑った。

「白銀、其処まで慌てなくても……」

「い、いえ……慌てるべきものかと……」

「白銀にとっちゃな」

と、これまた笑いながら云うのは黒鉄クロガネだ。

「ま、取り敢えず、黒鉄殿は心配なさそうですね」

「ち、父上……！」

「ふふ。そう心配なさらずとも、何もしなければ、被いませんよ」

笑う白蓮父。眼が笑っていない。白蓮は気付かないふりをした。

「父様、では失礼します」

「御飯が出来たら呼ぼう」

「有難う御座います」

白蓮はニコと笑って、障子を閉める。

白蓮の髪は動くたびに揺れる。それが綺麗だと、よく両親は云う。長いのはちよつとだが、白蓮も気に入っているので、髪を切らない。自室について、白蓮はまず落ちている制服などをハンガーにかけ、雑誌を拾い、ラックに入れる。そのあと、机に向かって、今日の復習をする。

「流石我が主……！ 日々の勉学を怠らない……」

「我が主は秀才でいられるからな。このくらい、当たり前だろう」

二人はうんうんと頷く。こうやって手放しに褒められるのは少し気恥ずかしい。白蓮は顔を赤くする。

「二人共、そんな風に褒めないでよ……恥ずかしい」

『何が（です）？』

「質^{たち}悪いなー、もう」

白蓮は顔を赤くしながら笑った。

数時間経った後、父に呼ばれ、白蓮は階下へと降りて行った。

モノクローム9

「あれ？ 依竜^{イリュウ}、居たんだ」

居間へ行けば、見知った顔が複数ある。

「あ、叔父様、ご無沙汰しております」

「やあ、白、久しぶりだね」

ニコリ、と人懐っこそうに微笑むのは依竜の父で、自分の父親の弟の駆竜^{クリユウ}だ。

「ホント、美少女だねえ、白は。幼馴染で、これでこいつの許嫁だったら吃驚だな」

「ち、父上！？」

「あ、叔父様。私、何があっても依竜のお嫁さんだけは厭です」

「……………」

キパツと笑顔で云う白蓮。父は優越感に似た貌をしていた。

「駆竜、私はまだお前の出来そこない息子に白蓮はやる気など無い」

「相も変わらず、兄上は親馬鹿だなあ」

笑顔が怖い二人だ。依竜は貌を引き攣らせているが、白蓮は修羅場は慣れている。

「それで、駆竜は何をしに来た？ それをまだ訊いていない」

「ああ、忘れておりました。実は…………」

そのあとに続いた言葉に、白蓮と父は驚いた。

「「はあっ！？（オヤジ・お爺様）に勘当されたあ！？」」

眼を向く二人を、当の本人達はニコニコと笑いながら見ていた。

「ええ、あまりにも依竜の出来が悪くて……育てた私も悪い、と云うことで。女房は本家で預かる、と奪われてしまいました……」

「……阿呆か、お前は……」

父は呆然と呟く。白蓮もそれに頷く。

「まだ、女の白蓮の方が霊力が高い、と云われましてね……確かに、白の方が霊力、潜在能力もうちのバカ息子より上回っているんですが……、これはあんまりかと……」

「いや、オヤジの対処は適切だと思うぞ、私は」

「私もそう思います、叔父様……」

白蓮も同意すると、駆竜はお膳に突っ伏す。

「親子そろって酷いよー」

いや、正論かと……そろってそう思った神崎親子であった。

モノクローム9（後書き）

…サブキャラだけど、白蓮父の名前考えてなかった……。
済まぬ、父よ……！

モノクローム10

驅竜と依竜はそのあと白蓮父にこっぴどく説教され、一週間だけ滞在を赦された。

「叔父様と依竜はこの部屋を使ってね。ここは客間だし、自由に使っていていいよ。でも、汚したら掃除してもらっちゃうからね」
にこ、と笑って云えば二人は貌を引きつらせた。

「あ、そうそう。毎日道場とお風呂と廊下とかの掃除もやって、って母様が」

「鞠義姉さん酷過ぎるよ……」

「あ、じゃあ出て行きます?」

「それは厭」

二人して声を合わせてきつぱりと云う。白蓮はこめかみに怒りマークを作りながら笑った。

一通り案内を済ませた後、驅竜と依竜は白蓮母の手伝いを強いられた。

「父様、お先にお風呂をいただきます」

「ああ、入ってきなさい」

白蓮は父に礼をしてから風呂場へ行く。が、父に止められた。

「待ちなさい、白蓮」

「? 何でしょう? 父様」

「白銀殿、黒鉄殿。くれぐれも覗き見しないように。した場合はすぐにでも末梢させていただきますので」

ニツコリと黒い笑顔で云われ、白銀と黒鉄は大きな声で返事をした。白蓮は苦笑し、踵を返して今度こそ風呂場へ行った。

ちやぶん、と五右衛門風呂に浸かる。

「ふー」

白蓮の髪は腰より長い為、風呂に入るときは高くまとめ、だんごのようにしている。

「今日は散々だったなあ……ああ、長風呂したら父様が心配しちゃう……」

あと10秒。そう呟いて白蓮は10数え始める。

《主。髪を乾かすときは……》

『判ってる。タオル越しでしょう？　少し蒸すけど、あれの方が効率いいし節電になるんでしょう？』

口では数えながら、脳内で答える。とんだ器用者だ。

《流石です。それと、もう10秒過ぎて25秒です。上がりましよう》

黒鉄に促され、白蓮は風呂からあがる。

ーブオオオ

ドライヤーを使い、髪を乾かす。

「ふわあああああ！　暑い！！　流石に暑いわっ！」

《我慢して下さい。ついでに、俺達も暑いので……》

幾ら体内に棲んでいる居るとは云え、それなりに暑いのだ。

「白蓮、上がったか？　入っても平気か？」

「あ、はい。大丈夫です、父様」

ドライヤーを仕舞い、返事をする。

ーガラ

父は白蓮を見て、微笑み、髪を一つまみすくう。

「……もう少し乾かしなさい。ちゃんと乾かしないと風邪をひいてしまふ。こちらに來なさい」

手招きをされ、云わるままに白蓮は着いて行く。

「お前の髪は長いからな。ちゃんとしないと乾かないからな……」

「申し訳ありません。でも、有難う御座います」

少し照れくさそうに謝罪とお礼を云うと父は「親子なのだから。

いいよ」と優しく云った。

「親しき仲にも礼儀あり、と云いますし……私は父様を尊敬していますし、こんな事をしてもらうのは、とても嬉しいのですが、照れ臭いです」

「気にしなくていい。ただ、もう少し口調を崩してくれないか？

この年になつたら逆にあれだろうけど、大事な一人娘に敬語を使われるのは少しな……」

「う。え、あ……と……その、御免なさい……」

少し口調を崩して謝罪をすれば父は嬉しそうに笑み、白蓮の頭を撫でた。

「其処まで畏まらなくていい。気軽に話しかけなさい、白蓮」

初めて父にこういう口調で接するので、白蓮は貌を紅くしながら

「はい」と云った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0497p/>

白い蓮とモノクロ日常

2011年8月17日03時24分発行